Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.23
2008

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■NASHIM会長に蒔本長崎県医師会長が就任
■西城山小学校で出前講座を開催
■チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へヒバクシャ医療研修
■ベラルーシ共和国から医科大学生を招聘
■核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附
■セミパラチンスク市長がNASHIMへ感謝状を贈呈

被爆者健康講話へ参加するベラルーシ共和国の医科大学生ら

NASHIM会長に
蒔本長崎県医師会長が就任(4月)

NASHIM発足の5年目(1996年)から12年間もの長きにわたってNASHIM会長を務めていただいた井石哲哉前長崎県医師会長が3月にご退任され、後任として蒔本恭(まきもとやすし)長崎県医師会長が新しく就任し、4月から事業推進のためご尽力いただいております。

蒔本会長は、長崎市の田上病院の院長を務めておられ、午前中は病院の外来、午後は医師会の用務などでお忙しい中、海外からの受入研修実施の際などは研修生等との交流会へ積極的に参加していただいています。

機関誌発刊にあたりご挨拶をいただきました。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 会長に就任して

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長への就任にあたりまして、皆様に一言ご挨拶申し上げます。

当協力会は、私の会長就任まで15年間にわたって、世界の放射線被ばく事故による被災者救済のため、多くの活動を展開しております。活動の中心である受入研修事業においては、受け入れた研修者数が昨年度までに394名に上り、また、現地へ派遣した専門家等も93名になります。さらに、被爆50周年目に始められた永井隆平和記念・長崎賞では8名1団体を表彰し、出版物も医学教科書をはじめとして数多く、講演会や機関誌などを通じて情報発信を行うなど、活動の活発さが伺われます。来日された各国からの研修医師と接してみましても、現地の長崎に対する信頼感と密接な友好関係が感じられ、当協力会の国際的な貢献を実感するものであります。

このような多岐にわたる活動と実績は、「被爆地長崎で蓄積された医療の実績を世界で苦しむヒバクシャへ」との願いがこもった皆様の税金により支えられ、NASHIMを構成する各団体の献身的なご協力により成し遂げられてきたものと思います。

前任の井石哲哉先生は、カザフスタン、ウクライナ、ベラルーシ、韓国等の現地を訪問してその状況を確かめ、被災者のためにと懸命にNASHIMの活動を支えてこられました。私も被爆者のひとりとして、原爆被爆の悲劇を乗り越えて蓄積された医療の実績が、世界中で苦しんでいる人々の救済に役立てば、この上ない喜びです。

12年もの間、NASHIM会長を務め上げられた井石先生のご意志を引き継いで、皆様方と一緒に今後の活動を支えて参る所存でありますので、どうぞよろしくお願い致します。

今後ともNASHIMの活動に広く皆様のご支持、ご理解をいただきますよう、また、本事業内容の益々の充実と発展を切望しまして、ご挨拶とさせていただきます。

普及啓発事業

西城山小学校で出前講座を開催（7月）

夏休みを直前に控えた7月13日、長崎市立西城山小学校で5年生74名の皆さんを受講者として出前講座を開催しました。

NASHIMAでは、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、平成の鳴滝塾　～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～と題して、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う出前講座を昨年度から実施しています。

今回は「原爆直後の救護活動と調査」というテーマで、長崎大学原爆後障害医療研究施設の三根真理子准教授にお話しをしていただきました。

講座はグビロが丘など長崎大学医学部内にある被爆遺構の紹介から始まり、原爆直後の悲惨な被害状況の中での調来助教授、永井隆博士、秋月辰一郎医師等による救護活動や、その後の日本とアメリカによる調査について等がスライドを使ってわかりやすく説明されました。途中には、「長崎に落とされた原子爆弾の通称は？」などのクイズが所々に織り交ぜられ、生徒の皆さんと三根准教授とのやり取りが非常に活発な授業となりました。また、最後にはアニメ「アンゼラスの鐘」のダイジェスト版が上映されましたが、アニメーションによりリアルに描かれている焼け野原となった被爆後の惨状の中での秋月医師らによる懸命な救護活動の様子は、生徒の皆さんに強く訴えかけるものがあったようです。

西城山小学校では1学期中の総合学習の中で原爆について調べ、原爆記念日の8月9日に発表することになっていたそうですが、今回の講義では、生徒さん方がそれまでに調べて来たこととまた違った角度での知識が得られたと思います。

この講座を通して若い世代の皆さんに長崎特有のヒバクシャ医療や国際協力に関心を持っていただき、将来、世界のヒバクシャ医療へ貢献できるような人材が一人でも育ってくれることを期待します。

明るい語り口で授業を行う三根准教授

授業を真剣に聞く子どもたち

生徒の代表から三根准教授へお礼の言葉

講座を受講して…（生徒の感想）

○被爆直後の救護活動と調査をしたのは永井隆博士だけと思っていました。でも、今日の授業で調来助教授や秋月辰一郎先生もいることを知りました。

○今まで勉強したこと以外にも色々なことが知れて良かったです。NASHIMAの活動のことも初めて知りました。

○自分も怪我をしたり、家族を亡くすなど原爆の被害にあっているのに、永井博士、調教授、秋月医師は救護活動をしてすごいと思いました。この授業でまた平和の大切さを知りました。今日の授業は忘れません。

受入研修事業

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へ ヒバクシャ医療研修(7～8月)

蒔本会長を表敬訪問する研修医師と受入研修担当の長崎大学山下教授

チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して指導や医療情報提供を行うため、今年度も6名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は7月末から1ヶ月余りに渡って長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学んだり、ヒバクシャ医療分野での共同研究のため、関係者との交流を深めました。

また、長崎原爆資料館を見学したり平和祈念式典へ参列するなど、長崎原爆の実相についても学び、日赤長崎原爆病院や放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護やケアについても理解を深めました。

ロシア連邦　サンクトペテルスブルグ卒後教育医学アカデミー

Kovanko Georgy（コワンコ ゲオルギ）医師　専門：老年医学

原爆被爆者の治療施設や制度について知る機会を提供してくださったNASHIMの皆様に深くお礼申し上げます。特に、山下教授が与えてくださった研究の機会と温かいもてなしに感謝しています。

私の研究テーマは細胞工学であるため、原爆後障害施設で行われている新しい研究方法について学ぶことは大変重要でした。長崎大学の先生方により行われた講義はとても興味深く、今後役立つものと感じています。研究室での私の研修と実験に多大なお力添えをいただいたサエンコ助教、タチアナ助教に感謝申し上げます。また、日本の皆様とのコミュニケーションのために尽力いただいた通訳の木村さんにも心から感謝しています。

この研修は実り多く、甲状腺癌研究の発展と甲状腺癌患者にとって、有益なものになることと思います。

ウクライナ共和国　ウクライナ医学アカデミーマルゼエフ衛生環境医学研究所

Tsymbalyuk Olexandr（ツィムバルク オレクサンドル）医師（上級研究員）　専門：放射線疫学

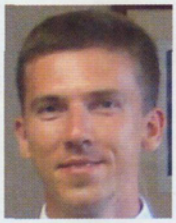
まず第一に、私たちに対する研修指導者の皆様と日本の皆様の暖かさ、親切さに感謝申し上げます。私たちは、日本の健康保護のシステムの構造について詳しく説明していただき、被爆者の治療を行う多くの長崎の施設を訪問しました。各施設で行われている正確で深い調査活動と素晴らしい資料や技術的なベース、それに個人の高いプロ意識に感銘を受けました。財団法人放射線影響研究所で得た知識は放射線衛生学と放射線疫学の専門家として、とても有益なものでした。同研究所の専門家によって、原爆被爆による有害要因の被爆者に対する影響についての情報を提供していただき、また、有用な資料の収集と総括のために多大なお力添えをいただきました。

放射線影響の研究分野における実りの多い協力関係が、私たちの国の間で今後も継続することを望んでいます。

ベラルーシ共和国　ベラルーシ卒後医学教育アカデミー

Leonova Tatsiana（レオノワ タチアナ）医師（上級研究員）　専門：小児科、内分泌

私は主に原研細胞で研修を受け、そこで新しい研究方法について学びました。小児内分泌について学ぶ機会や患者のカウンセリングに立ち会う機会をコーディネートしてくださった大津留准教授と本村先生に心からお礼を申し上げます。文化的なプログラムも多様で、週末には伊王島の海で海水浴を楽しみ、グラバー園、出島のオランダ商館、大浦天主堂、諏訪神社などを訪問して、日本人の歴史と伝統を知る機会も得ることができました。私たちの訪問を手配してくださった皆様や異なる放射線事故の影響で苦しむ者へ関心を示してくれた皆様、放射線の影響への対処を教示くださり、この科学分野への貢献を続けている蒔本会長と山下教授へ深く感謝申し上げます。



ベラルーシ共和国　ゴメリ医科大学

Skuratau Aliaksandr（サクラタウ アレクサンドル）医師（助教）　専門：外科

長崎市は深い歴史と文化を持ったとてもきれいな街で、戦争のみが人々に暗い影を落としており、原爆資料館訪問や、被爆者と話す機会によって、1945年に起こった悲劇で日本人が感じた苦痛を理解することができました。

私は特に外科医として癌の初期に行う医療と診断の新方法に興味がありましたが、日本の研究者は私が興味を持ったこと全てを熱心に教えてくださったので、癌の早期診断のための新しい内視鏡方法を学んだり、早期胃癌と早期結腸癌で解剖の内視鏡粘膜下手術や、腹腔鏡補助下大腸切除術、摘出、肝臓移植、甲状腺摘出、乳腺切除術など多くの興味深い手術に立ち会うことができました。NASHIMの研修期間中に学んだことは、ベラルーシでの患者への医療に必ず役立つことと思います。

カザフスタン共和国　セミパラチンスクがんセンター

Bolsynbekova Saltanat（ボルシィンベコワ サルタナト）医師（主任）　専門：病理学

この訪問は私にとって、多くの印象と専門的な技術をもたらしました。被爆者の養護施設の訪問では、原子爆弾が投下された悲惨な日を生き延びた人と会うことができ、忘れられない経験となりました。また、8月9日に平和公園で行われた63回目の平和記念式典に出席できたことは私にとって名誉なことでした。全世界を揺るがした日本人の悲劇は絶対に忘れられません。長崎にいる一ヶ月の間、新免疫組織化学の新しい手法の習得を手伝ってくださる研究員を紹介していただき、高度な専門チームの中で研究する機会を提供していただきました。NASHIMの皆様に私の心からの感謝の気持ちを伝えたいと思っています。特に、山下教授、関根教授、メイルマノフ・セリック助教の援助ともてなしに感謝しています。

カザフスタン共和国　セミパラチンスク医科大学

Semenova Yuliya（セメノバ ユリヤ）医師（講師）　専門：眼科

今年の8月にNASHIMのプログラムに参加できたことを大変光栄に思っています。研修では長崎大学病院の眼科における活動を視察し、参加する機会を与えていただきました。眼科のスタッフは北岡教授の指導の下、高水準のアイケアを行い、また現代の眼科へのニーズに沿うことを目指した研究を行っていました。私は幸いにも、洗練された硝子体網膜手術に立ち会い、白内障水晶体超音波乳化吸引術の技術を習得できました。

長崎で私たちを温かく歓迎し、知識と経験を分けてくださったNASHIMのご尽力に大変感謝しています。このプロジェクトへ参加したことによって得た経験は、私たちの自国のヒバクシャ医療の改善に効果があるものと感じています。

受入研修事業

ベラルーシ共和国から医科大学生を招聘(8月)

受入研修担当の長崎大学高村教授と齋藤長崎大学長を表敬訪問

2年ぶりに医科大学生へヒバクシャ医療研修を実施

チェルノブイリ原発事故の影響によって甲状腺がんを発症し治療(手術)を受けた経験を持つベラルーシ共和国の医科大学生を長崎に招聘して、8月1日から約10日間のヒバクシャ医療研修を実施しました。NASHIMでは2006年にチェルノブイリ事故20周年記念事業の一環として同様の境遇を持つ医科大学生4名に対して受入研修を実施していますが、彼らのように被ばくによる健康障害を持ちながら医師を目指して頑張っている若者に、今後のヒバクシャ医療を担っていただきたいという期待を持って、今年度も研修を実施することが決まりました。

平和式典へ参列
(左からクラウチャンカさん、ムンデェラワさん、ベラルサウさん、ミフナベツさん)

来崎した3名は長崎大学の原爆後障害医療研究施設や医学部・歯学部付属病院で専門知識を習得したり、日赤長崎原爆病院や恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を行い、また、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館が行う被爆者健康講話へも参加して受講者へ自らの経験を語るとともに、被爆者と意見交換を行いました。8月8日には長野で研修を受けていたゴメリ医科大学のドミトリ・クラウチャンカさんも合流し、翌日の平和祈念式典へ参列して長崎原爆の被災者にご冥福をお祈りしました。真夏の暑い盛りでしたが異国の地でヒバクシャ医療や原爆被爆の実相について学ぶ機会を得、普段できない多くの経験をして強い印象とともに帰国したことと思います。

皆様方の国での第一印象としては、人々の温かい心とホスピタリティーの素晴らしさでした。日本については多くの素晴らしさを聞いていましたが、自身でこれについて確信しました。私にとって、非常に価値があったのは、長崎大学でのトレーニングにより得られた知識です。日本における保健システムを深く知ることができ、また、医学の発展条件を自身の目で見て感じることができました。私の観点では、これは医学技術だけではなく、医師と学者の個人的な質や全ての医学関係者の意識に組み込まれた最新技術が必要であると思います。セミナーへの参加や講義の受講、手術、外来に立ち会うことができたおかげで、私は多くのことにおいて新天地を開拓でき、大変意義ある研修となりました。この研修により始まった私たちの協力関係が今後も発展することを希望します。最後にNASHIM、長崎大学、長崎原爆病院に対して我々自身の知識向上の機会を与えてくれたことに感謝いたします。

ベラルーシ医科大学3年　ドミトリー・ミフナベツ

日本訪問では、博識で、面白く、高い文化的な多くの人々と出会うことができ、おとぎの国のような印象を受けました。日本の方々は、世界に広く届くような美しい言葉を話し、街には過去の事実を示すかけらを集めた博物館、記念碑が多く建設してあるように思いました。また、出会った皆さんに接する中で、日本人は非常に勤勉な国民であるという印象を持ちました。何事にも注意深く、詳細に事実を残すところが、医学に通じると思いました。

ベラルーシ医科大学5年　ドミトリー・ベラルサウ

長崎大学病院や日赤原爆病院訪問では、日本の高く効率的な医療レベルを学ぶことができ、大変興味深く、役立ちました。特に、長崎大学病院では初めて甲状腺摘出の手術に立ち会いましたが、私も以前受けた手術なのだなと非常に興味深かったです。

最も印象を得たのは原爆ホームであり、原爆被爆者に対する親切で配慮の行き届いた接し方や、養護施設の高レベルな生活環境を見学することができました。

被爆者健康講話へは様々な人が来場し、マスメディア関係者もおられ、翌日の新聞で私たちの写真が載っていたのを見たときは、驚くと同時に嬉しく思いました。また原爆後障害医療研究施設の訪問も興味深くためになるものでした。

長崎訪問は全てがとても良かったです。日本はすばらしい国であり、来日した時点から多くのことに驚かされました。

ゴメリ医科大学4年　カチャリーナ・ムンデェラワ

被爆者健康講話へ参加

今年度、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館では被爆者を対象とした被爆者健康講話を開講していますが、講座の第3回目はNASHIMとの合同事業として、長崎大学医学部の高村昇教授をコーディネーターに、ベラルーシ共和国から招聘した3名を加えたシンポジウム形式の講話「チェルノブイリ原発事故から22年・世界のヒバクシャ」が実施されました。

会場からの質問を受ける医科大学生

講話は甲状腺のエコー検査の実演などを交えて、高村教授がチェルノブイリ事故後の放射能汚染状況や事故による身体への影響などについて説明することから始まり、その後、ベラルーシの学生3名が、被ばくにより甲状腺がんを患った過去の経験や医師を目指して勉学に励んでいる現在の状況を語りました。

彼らは、「治療は、肉体的にも精神的にもつらく、思い出したくない」と振り返りながらも、「自分が助けられたように、将来は人々の健康のために尽くしたい」と話し、今回、日本でヒバクシャ医療研修の機会が与えられたことに感謝していると述べました。

高村教授によりチェルノブイリ事故による健康影響がわかりやすく説明されました。

また、受講者との意見交換を行い、「被爆後の思いや社会の対応はどのようだったか」、「若い世代は被爆者の話をどのように受け止めているのか」などと来場された被爆者や長崎大学の医学部生に対して質問し、原爆被爆という背景の異なる放射線被害の状況についても理解を深めました。

受講後のアンケートには、「子どもの頃につらい治療を受けたにもかかわらず、他人のために尽くそうという心構えに感動した」、「小児甲状腺がんを発病し、手術等の治療を受けた後も一生苦しまなければならないという話を聞き、放射線の恐ろしさ、原発事故の恐ろしさを感じた」といった感想や「（原爆被爆者と原発事故の被曝者について）継続して交流と対談をしてほしい」といった意見がありました。

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附(8月)

今年も核兵器禁止平和建設国民会議(核禁会議)に寄せられた浄財を活動助成金としてNASHIMに寄附していただきました。核禁会議は１９６１年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のための積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施し、多くの医療施設等へ検診者、車椅子、ベッド、医療機器等を贈呈しています。NASHIMへも毎年活動助成金を寄附していただいており、いただいた助成金は医学教科書の出版等に役立っています。

事務局を訪れた川村核兵器禁止・平和建設長崎県民会議議長

贈呈式は８月７日に長崎原爆資料館ホールで執り行われ、NASHIMからは藤田事務局長が出席して、長崎県被爆者手帳友愛会等の９団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。NASHIMとしましては世界のヒバクシャ支援のため、この活動助成金を有効に活用したいと考えております。

セミパラチンスク市長がNASHIMへ感謝状を贈呈(9月)

感謝状を受け取った兼松教授

今年の９月５日から13日にかけて、運営部会長である長崎大学兼松教授と事務局員が派遣事業としてカザフスタン共和国を訪問しましたが、現地滞在中に、セミパラチンスク市長からこれまでのNASHIMのヒバクシャ医療協力に対する感謝状が贈呈されました。

NASHIMでは、旧ソ連時代の核実験によって被爆に関する問題を抱えるカザフスタン共和国から1996年に医師等の受入研修を開始しています。研修者数は合計19名に上り、また、受入研修開始の翌年から始めたカザフスタン現地への専門家派遣も今年で17名の実績となりました。そのほか、第2回永井隆記念・長崎賞を1997年にソ連時代のセミパラチンスク核実験による住民への放射線障害を調査したサイム・バルムハノフ博士に授与するなど、12年間にわたってヒバクシャ医療協力を行っており、長崎大学を中心とした密接な関係を築いています。

今回の感謝状の授与は、このようなNASHIMの協力活動を評価していただいたものですので、今後もより一層、現地のヒバクシャへの支援が充実するよう活動を継続させていきたいと思います。

感　謝　状

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)　様

核実験場の影響に苦しむセミパラチンスク市民のリハビリテーションプログラムに多大な尽力をいただき、心から感謝申し上げます。
セミパラチンスク市民に代わり、貴殿のますますのご多幸とご活躍をお祈り申し上げます。

市長　M.アイナベコフ

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第23号
発行／平成20年10月27日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)
〒850-8570　長崎市江戸町2-13(長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内)
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail n_admin@nashim.org